

第7回 消費者制度のパラダイムシフトに関する専門調査会（2024年6月25日）

対等性・脆弱性・相互依存性

—政治哲学から消費者の脆弱性を考える—

玉手 慎太郎

（学習院大学法学部政治学科・教授）

今日の報告のポイント

事前にいただいた報告内容への要望をふまえて以下 2 点：

1. 正義と幸福の関係をどう考えるか
2. 意思決定の脆弱性と相互依存性をどう考えるか

1. 正義と幸福の関係

【1-1. 現代政治哲学における正義の基本的な考え方】

- 正義は必ずしも人を幸福にすることを目的としない
- ジョン・ロールズによれば、正義の原理の役割は「社会の基礎的諸制度における権利と義務との割り当て方を規定するとともに、社会的な協働がもたらす便益と負担との適切な分配を定める」ことにある（ロールズ2010, 7頁）
 - 一部の人だけが便益を得て、別の一部の人負担を押し付けられるようなことがないように、権利と義務をうまくルール化しましょう、ということ
- なぜ正義が必要なのかといえば、究極的には、**人々是对等な存在であり、そのことが尊重されなければならない**から
 - もし人々が対等に扱われなくて良いなら、正義も不要（力のあるものが力のないものを支配してもなんら問題にならない…それは家畜を飼うのと同じこと）
- ある種の功利主義の立場をとるなら正義と幸福とは一致するが（人々是对等に幸福の主体として取り扱われるべきというロジック）、正義が常にそうなるわけではない

1. 正義と幸福の関係

【1-2. 消費者問題における正義】

- 消費社会の複雑化によって一部の人が一方的に不利益を被っているのであれば、それを防ぐルールを設定することは基本的に正義にかなうと言えそう
- 他方で、個人が自分の判断で行動した先に損すること(=幸福を実現し損ねること) それ自体は必ずしも正義に反することではない
- 人々を対等な個人として尊重するとは、彼らの自由を尊重すること（一方向的に保護すべき対象とみなさないこと）でもあり、それは**失敗する自由を含意する（してしまう）**
- カントは「啓蒙とは何か」の中で次のように言う：「啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜けでることだ。未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことができないということである。人間が未成年の状態にあるのは、理性がないからではなく、他人の指示を仰がないと、自分の理性を使う決意も勇気ももてないからなのだ。」（カント2006, 10頁）
 - とはいえ「**他人の指示**」がないと**選択が難しすぎる**のが現代社会

1. 正義と幸福の関係

【1-3. パターナリズムと個人の自律】

- 個々人の幸福の増進のために介入することがすべて誤りであるわけではもちろんない（政府は正義以上のことを成しうる＝パターナリズムはありうる）
- しかしその場合でもやはり個人の自律の尊重は無視され得ない
- それゆえ同じパターナリズムであっても、**手段パターナリズムと目的パターナリズムとの区別**が重要（玉手2022, 60-63頁）
 - 手段パターナリズム：当人が自ら設定した目的をうまく達成できない場合に、達成するための手段を、当人の意思と関係なく強制する
 - 目的パターナリズム：当人が自ら設定した目的を、幸福につながっていないとして拒否し、目的それ自体を当人の意思と関係なく強制する
- 考えてみたい問い（1）：デジタル化やAI、高齢化といった問題は、どちらのパターナリズムを要請するのだろうか？

2. 意思決定の脆弱性と相互依存性

【2-1. 脆弱性という視点のマイナス面】

- その決定は当人が自らの意思で決めたものだとは言えない、というロジックは、原理的には全ての決定に対して適用することができる
 - そもそも外部の影響を全く受けていない意思決定はあり得ない
 - であれば、あらゆる意思決定について、外的影響を想定できる
 - すなわち、それは真の自己決定ではないと言えてしまう（？）
- つまり「意思決定の脆弱性」は、**個人の自由を否定する**強力な論拠となる
- また、現代の日本（というより近代社会）においては、自ら意思決定し、その結果を自らがなしたこととして引き受ける態度が求められている（cf. 刑罰）
- よって「意思決定の脆弱性」は、**個人の主体性を否定する**強力な論拠ともなる
- 考えてみたい問い（2）：消費契約に困難を抱えている人の選挙権を否定すべきか？

2. 意思決定の脆弱性と相互依存性

【2-2. 意思決定における他者の役割】

- 事実として、高齢者はしばしば自身の利益に反する決定をしてしまうのであり、脆弱性の問題を無視することはできないように思われる
- しかしながら、そのような判断ミスは高齢者が「脆弱」であることに由来するのか？
 - むしろ高齢者が一人で暮らしていて、誰にも相談できないからでは？
 - 高齢者に限らず、一人で決めろと言われても大抵の人はうまく決められない
- 一人きりでの（independent）決定と自律的な（autonomous）決定はイコールではない
- 自律的な決定のためには他者の存在が不可欠であるという考え方がある：**関係的自律**
 - 他者関係があってはじめて人は自律的な価値観や判断基準を獲得する
 - そして適切な他者関係の中にあってはじめて人は自律的な決定をなすことができる
- 相互依存性は脆弱性と同じではない（依存しないことが理想ではない）

2. 意思決定の脆弱性と相互依存性

【2-3. 医療現場における意思決定の尊重】

- 医療現場のインフォームド・コンセントをめぐる議論においては、自律的な意思決定のためには**適格性と真正性**の2つが必要である、と言われる（玉手2019, 168-170頁）
 - 適格性（competency）：十分な判断能力（理解力や思考力）を有していること
 - 真正性（authenticity）：自らのアイデンティティに基づいて、それこそが「自分自身の選択」だと納得できるような選択を下すことができること
- 自律的な意思決定とは判断能力のみの問題ではないならば、適格性のみを問題として、それをサポートするのでは不十分で、**真正性についてもサポートが必要**
 - たとえば終末期の患者に対して家族との対話の時間を十分に確保したり、医療従事者が予後だけでなく価値観についても話し合ったりすることが試みられている
- 言い方を変えれば、合理的な意思決定ではなく「納得できる」意思決定が求められる

2. 意思決定の脆弱性と相互依存性

【2-4. 自己決定における納得の意味】

- 哲学者の宮野真生子は次のように述べる：「結局、私たちはそこ〔選択場面〕に現れた偶然を出来上がった「事柄」のように選択することなどできません。では、何が選べるのか。この先不確定に動く自分のどんな人生であれば引き受けられるのか、どんな自分なら許せるのか、それを問うことしかできません。そのなかで選ぶのです。だとしたら、選ぶときには自分という存在は確定していない。選ぶことで自分を見出すのです。…〇〇な人だから△△を選ぶ、のではなく、△△を選ぶことで自分が〇〇な人であることが明らかになる。偶然を受け止めるなかでこそ自己と呼ぶに値する存在が可能になるのだと」（宮野&磯野2019, 229頁）
- 要するに、その人の価値観に沿った意思決定というのは、選択前に価値判断がすでに形成されている、というようなものではないかもしれない、ということ
- 考えてみたい問い（3）：「不幸だが納得している人生」はあり得るか？

まとめ

- 正義とは、人々を幸福にすることではなく、人々を対等な存在として尊重し、対等な存在として生きていけるような仕組みを整えることである
- 対等な存在として尊重するとは、各人の自由を認めることであり、そうすると失敗する人が出てきてしまうのはどうしても避けられない
- 近年の問題は（特に消費の場面で）失敗する人が増大しているということ
- しかしそれは必ずしも人々が脆弱性をもつからではなく、むしろ関係性をうまく構築できていないからかもしれない
- そもそも人間はたった一人で意思決定できる存在ではない
- 大事なのは、合理的な選択をなすことではなく、選択に納得できること（かも）
- 支援すべきは合理的な選択ではなく、その人がその人らしく納得して生きていけることである：なすべきは「脆弱性」を根拠に自由や主体性を否定することではない

まとめ

- とはいえ、以上の議論では抽象的すぎる：具体的な提言は？
- 言えそうなこと（１）：消費者問題は、ルール作りだけでなく、地域社会の問題や労働問題などをトータルで考えて対応すべきもの？
 - 生活の基盤であるはずの人間関係やコミュニティが衰弱しているのを消費者法制でなんとかしようとしても厳しい（できることはそれしかないかもしれないが）
- 言えそうなこと（２）：消費者団体を、問題提起回路としてのみならず「消費をめぐる人々の意思決定をサポートする人的繋がり」として再定義できる？
 - 消費者の脆弱性ではなく消費者の孤独と生きづらさに問題の根があるなら、対策を練るべきは消費の場面ではなく消費の背景であることになる
- 少なくとも「現代では人々は脆弱性を有しているからルールによって守ってあげよう」というのが既定路線ではないのは確か

参考文献

- イマヌエル・カント. 2006. 『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3編』 中山元（訳） 光文社古典新訳文庫
- ジョン・ロールズ. 2010. 『正義論 改訂版』 川本隆史・福間聡・神島裕子（訳） 紀伊国屋書店
- 玉手慎太郎. 2021. 「関係的自律とインフォームド・コンセント：自由で「自分らしい」意思決定のためには何が必要か」 『現代思想』 49(9): 166-175.
- 玉手慎太郎. 2022. 『公衆衛生の倫理学：国家は健康にどこまで介入すべきか』 筑摩選書
- 宮野真生子 & 磯野真穂. 2019. 『急に具合が悪くなる』 晶文社